

Opera

Text by Seiko Tabata

セビリアの街全体が熱き
舞台と化す「カルメン」。

期間中は、マエストランサで開催される闘牛の他、アントニオ・カナレスらによるフラメンコのステージやオーケストラのコンサートなど、見どころも多い。



「セビリア国際音楽祭2004」

会場/スペイン・セビリア (第1幕・2幕: スペイン広場、第3幕: マリア・ルイサ公園、第4幕: マエストランサ闘牛場)
会期/9月2日(木)~12日(日) ㊟チャージング・ライブ ☎03-5288-8223 www.carmeninsevilla.com

JTB主催による、オフィシャルツアーも用意されている。

最終幕——闘牛士エスカミリーヨとともに、誇らしげな笑顔で観衆の前に現れるカルメン。しかし、そこには短剣を忍ばせ、嫉妬に狂った瞳で彼らを見つめるドン・ホセの姿が……「存じ、オペラ『カルメン』のラストシーンだ。しかし、公演の場は舞台ではない。スペイン・セビリアの闘牛場なのである。

1987年、エジプトのルクソールで開催された『アイダ』、続く北京の『トゥーランドット』と、街をそのまま舞台にしたオペラが好評を博したのは記憶に新しい。そして今年9月、第3弾となる『カルメン』がセビリア国際音楽祭2004のメインイベントとして上演される。

フランス人ジヨルジュ・ビゼーによって作曲された『カルメン』は、



19世紀の半ばにパリで初演された。しかし、当時のオペラは貴族や社交界をテーマにした物語がほとんどだったため、淫らな衣装で男を次々に誘惑するヒロインは観客たちに不評だった。しかも、ビゼーはそれから僅か3ヶ月後に36歳の若さで他界。スペインの地を一度も踏むことなく、失意のうちに世を去ったという。

時を経て現在、『カルメン』は世界

各国でロングランを続け、舞台だけでなく、映像・音楽ともに名演は数知れない。人気の理由は、作品のモチーフより、物語の根底を支えるスピリチュアルな要素にあるようだ。男の運命を狂わすカルメンは、よくファム・ファタールに例えられる。しかし、今回の演出を手掛ける映画監督のカルロス・サウラも指摘するように、彼女はある意味で理想の女性像を象徴している。最後には自らが破滅に導いた男と運命をともにするカルメンは、死をもって、不滅の愛を証明してみせるからだ。悲劇的な男女の物語は歌舞伎の世界でもお馴染みだが、カルロス・サウラはその姿に、日本的な匂いを感じているという。『血の婚礼』『カルメン』『恋は魔術師』の3部作に代表されるように、フラメンコ作品は、アンダルシアの血を受け継ぐ彼の十八番。完成度の高さは疑いようもなく、本作品でも新たな境地を切り開いてくれるだろう。

そして何より興味深いのは、舞台自体が『移動』する壮大な演出だ。観客は、第1幕目の舞台となるスペイン広場から、マリア・ルイサ公園そしてクライマックスのマエストランサ闘牛場へと、物語の進行に合わせて誘われていく。しかも、スペイン広場のすぐ隣にはシーンに登場するタバコ工場の跡地も現存し、通りにはスペイン名物のタパスや土産物店も設置される。ステージでは実現しえないリアリティを体感できるという趣向だ。街中に溢れる情熱に身を委ねてみてはいかがだろうか。